

## 『草枕』の「革命」

Junko Higasa

夏目漱石は旅に出たくなかった。大都市ロンドンで疲弊した神経をピトロッホリーで休めたように、コセコセした東京の神経疲労をせめて小説の中だけでも解消しようと熊本で過ごした時代へ運び、『坊っちゃん』同様書くのが楽しくてたまらないという風にペンを走らせ『草枕』を一週間で書き上げた。都市では日露戦争後、社会主義者に対する監視の目が厳しくなった。それに加えて個性発達のお蔭で一般市民まで他人の動向を気にして探偵化、泥棒化している。神経が休まらない。ひとときでも自他の区別に煩わされない非人情の世界でのんびりしたい。しかし蚤の国から蚊の国へ行くのはイヤだ。どこへ行こう。『どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る』—藝術は人の煩いを引き抜いて完成するもの—そうだ、俄か画工になって遠く離れた山里で藝術的心に浸って来よう。画工の年齢は 30 歳。小説の背景は漱石 30 歳当時。第五高等学校の同僚：山川信二郎と旅した 1897 年 12 月末の風景である。

漱石の宿泊先は熊本の「那古井館」（前田家別邸）。当主は明治維新前には細川家の槍指南を務め、維新後は農民と共に歩み、自由民権運動で海辺新地免租に取り組んだ第一期衆議院議員の前田案山子。彼が志保田の老人のモデルとなった。那美さんのモデルとなったのは次女の前田草。孫文らを中心とした中国同盟会の機関誌を発行する「民報社」で革命家や中国留学生の世話をした。結婚・離婚を繰り返すが那美さんとは事情が違い、彼女は自分の思う人生を生き抜いた。そして東京で革命の徒となった。

以下に引用を含めて『草枕』のある一脈をまとめる。そこには漱石が疲弊した世の中から逃れた「紙上の美の旅」から戻らなければならない現実の世界が描かれている。

\* 『文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏み付けようとする』現代の文明は、一人につき何坪何合かの地面を与えてその中で自由にせよと言いながら、周囲に鉄柵を設けてここから出てはならぬと脅かす。少しの自由がきけば、もっと自由になりたいと思うのが人情である。したがって更なる自由を求めて『憐れむべき文明の国民は日夜にこの鉄柵に噛み付いて咆哮している』『檻の鉄棒が一本でも抜けたら一世は滅茶々々になる。第二の仏蘭西革命はこの時に起るのであろう。個人の革命は今既に日夜に起りつつある。北欧の偉人イブセンはこの革命の起るべき状態について具さにその例証を吾人に与えた』画工は全ての人を見境なく貨物同様に積み込む汽車を見て、客車の中に閉じ込められた個人と、その個人に寸分の注意も払わない鉄車とを比較して「あぶない、あぶない」と思う。今の世はその危険に満ちている。\*

第一のフランス革命は「努力が報われない世の中に対しての正当な個性の発達の要求」であった。しかし個性の発達を許しながら、増長を抑えざるを得なくなった社会では、自由に味を占めた憐れな文明の国民が日夜檻から出たくて咆哮している。第二のフランス革命は「増大した欲」が鉄柵から飛び出した時に起るのだろう。(2013.4.14)